コンセプト

18世紀ヨーロッパ。この時代の思想家達は『人間』であることをどのように考えていたのだろうか。それをチェンバロという楽器を通して考察すると興味深い。この時代はチェンバロにとって、最盛期であり終焉の時でもあった。啓蒙思想家や科学者たちの一部、例えばDenis Diderotはチェンバロを『人間の鏡』であると定義づけ、それが人間の『エスプリ（魂）』を体現するものと考えた。チェンバロの外箱は人間の『身体』であり、弦はその『神経・筋肉』。『エスプリ（魂）』は外箱（身体）と弦『神経・筋肉』の共鳴が生み出す音と捉えた。言い換えると、人間性そのものは「非人間的」な要素の共鳴から発生するものであったのだ。この楽器とその弾き手が「一心同体」になると人間でも楽器でもないケンタウロスの様な不思議なハイブリッドに変化する感覚を覚えることもある。当時の弾き手や作曲家はチェンバロを通し「人間の領域」を越えようとしていたのは確かだ。チェンバロは、バッハの手によって音楽を通した信仰を体現する道具と化し、ラモー、クープランの場合は言葉にしようがない物質的な世界を超えたフェノメナを描くキャンヴァスであったのだ。ある観点からすると、チェンバロは18世紀の家具の一つでしかなかったのかもしれないが、見方を少し変えるとこの楽器は人間の世界を超えた異次元へのポータルとして重宝されていたように思える。言葉にし難いが、このリサイタルはチェンバロを通してまず過去の人間との対話、そしてその彼らが探し求めていた異次元との接触を試みる。

プログラム

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ（1685年 – 1750年）：平均律クラヴィーア曲集第1巻より抜粋
ヨハン・ゼバスティアン・バッハ（1685年 – 1750年）：イギリス組曲第6番 ニ短調 BWV 811
伊佐治 哲大（1997年生まれ）：即興
フランソワ・クープラン（1668年 – 1733年）：クラヴサン曲集第2巻より「ベルサン」、「神秘的なバリケード」

プロフィル：伊佐治 哲大　Tetsuhiro(Tetsu) Isaji

1997年東京生まれ。5歳よりピアノ、英国在住中の2008年よりオーボエを始める。
日本帰国後、2011年より青山聖樹氏の指導の下、オーボエを本格的に学び、音楽理論と作曲法をゼミソン＝ダリルに師事する。
高校卒業後、再び英国に戻り、オックスフォード大学にて音楽学の学士号（2020年First Class)、ケンブリッジ大学にて修士号（2021年）を取得。オックスフォード大学においては大学オーケストラにおいてオーボエを担当、同大学日本公演にも参加。オックスフォード大学在学中、同大学博物館収蔵の鍵盤楽器コレクションに触れ、
古楽鍵盤楽器の世界に魅了され、以降、音楽学研究と共に、チェンバロの演奏も独学で始める。チェンバロ演奏で学内コンクール1位獲得後、演奏会を許可される。2021年より本格的にチェンバロ、古楽奏法を学ぶためベルギーに渡り、ブリュッセル王立音楽院修士課程にてF.ハース、P.ザンズに師事し2024年最優秀で卒業。同音楽院在学中の、2023年ワンダ・ランドフスカ音楽祭・コンクールにてプリモ・プレミオ（第1位）、ルクセンブルク国立劇場、フラジェ（ブリュッセル）、フォワイエ・ド・レーム（パリ）などで演奏。また、同学院の学生を中心とした古楽アンサンブル『Komorebi Consort』を創設、昨年3月にはサブロン大聖堂にてS.クイケンの監修の下、J .S.バッハ『ヨハネ受難曲』の演奏をアートディレクターとして成功させた。現在は更なる研鑽のためオランダ国ハーグ王立音楽院にてC.チェラシ、P.アイルトンに師事。18世紀の指揮法、合奏法の研究とその演奏での復活に取り組んでいる。加えて、B.アラール、P.アンタイ、B.クイケンのマスタークラスにも参加し研鑽を積んでいる。